

ママに息抜タイムを贈る 子育てサポート事業

子育てサポート アンティ・マミー
(千葉県市川市)

平成19年度子育て支援基金「地方分」助成団体

DATA

〒272-0836 千葉県市川市北国分4-10-3
(風の谷保育園内 さかえ・こどもセンター)
TEL: 047-373-0191

“ママにはちょっと息抜きを、マミーさんには楽しさを”をコンセプトとする、子育て支援ボランティア(団体)があります。平成19年度に「ママに息抜きを贈る子育てサポート事業」で助成を受けた子育てサポート アンティ・マミー。母親にリフレッシュの時間をプレゼントするだけにとどまらない、大きな可能性を秘めたその取組みを紹介します。

お出迎え

扉の向こうから、子どもたちの大きな歓声や泣き声が聞こえてきます。そろそろと入り口のガラス戸を開けると、「ママあ」と、二つの泣きべそ顔が出迎えてくれました。マミーさんに抱っこされた男の子と、その足にしっかりとしがみついた女の子です。

ここは、千葉県市川市にある「北国分老人いこいの家」。月に2回、「子育てサポート アンティ・マミー」が9時45分から11時45分まで、「ママに息抜きタイムをプレゼント」する子育て支援事業を行っています。

「アンティ・マミー」の活動が行われている「北国分老人いこいの家」は、渡し船で有名な「矢切の渡し」の最寄り駅である北総線矢切駅から徒歩10分程度の、閑静な住宅街のなかにあります。1991(平成3)年に北総線が開通し、交通の便もよくなりましたが、それまでは、都心に向かうにも買い物にも不便な「市川のチベツト」といわれていたのよ」とマミーさんのひとりが笑って教えてくださいました。

アンティ・マミー— お母さんみたいな隣のおばさん

さて、ここで、「アンティ・マミー」の活動についてご紹介します。

「アンティ・マミー」は、「ママにはちょっと息抜きを、マミーさんには子どもとふれあう楽しさを」をコンセプトとする、子育て支援ボランティア(団体)です。具体的には、ボランティアである「マミー」さんが、公民館などを利用して月に1~2回、2時間程度、子どもたちをあずかります。ちなみに、「アンティ・マミー」とは、英語でおばさんという意味をもつAuntと、お母さんのMummyを組み合わせた造語で、「お母さんみたいな隣のおばさん」という意味合いをもっています。子どもたちには「お母さんのように安心できるおばさん」として、お母さんたちには「身近なサポーター」として、ともに子どもたちの成長を見守っていききたいというメッセージがこめられています。

活動場所は市内5か所。マミーさんとして登録されているのは総勢約80名。5か所とも予約制で、それぞれ1回の定員は20名程度。対象は1歳半から3歳くらいまでの未就園児です。あずかる側のマミーさんは5~7名。その活動場所の近くに住むマ

ミーさんが参加します。ママミーになるには、現在では3時間程度の講習と登録が必要です。活動時には、近接または隣接する地域子育て支援センターの保育士が参加し、ママミーさんをバックアップします。こうすることで、利用する側の子どもたちやお母さんはもちろん、ママミーさんも安心です。このようなきめ細かい配慮が活動を長続きさせる秘訣のひとつかもしれません。

「いつてらっしゃい」を大切に

では、実際の活動の様子をみてみましょう。

まず利用するお母さんは受付で利用料（500円）を払った後、子どもに名札をつけて、連絡メモに子どもの様子（食事、排泄、機嫌、好きな遊びなど）を書いてママミーさんに渡します。その後、子どもたちはママミーさんと一緒にお母さんを見送りまします。ここで、「アンティ・ママミー」が大切にしていることがひとつ。それは、必ずお母さんに「いつてらっしゃい」をすることです。子どもが遊びに夢中になっていると、そのまま「そ〜っと」出ていきたくないのでしよう。そのほうが泣かれませんか、子どもに悲しい思いをさせずに済むかもできません。しかし、たとえ遊びに夢中になっ

たことに必ず気づきます。自分の知らない間にお母さんがいなくなっている…。そのことに気づいた子どもはきつと動揺するに違いありません。確かに、子どもの注意がそれている際にお別れするのは、その「一瞬」はよいかもしれません。でもそれは、後に不安を与えることになります。また、「いつてらっしゃい」は「ただいま」にながります。「いつてらっしゃい」があるからこそ、お母さんは「ただいま」と帰ってくる。「だから僕はここで遊んで待っていればいいんだな」という安心感を子どもは覚えていくのでしょうか。

活動時間中、子どもたちは思い思い。一



遊びは思い思いに

人でもくもくとブロックを積み上げていく子もいれば、友達と「上手に」「コミュニケーションを取り交わしながら遊ぶ子もいます（こちらからみれば、コミュニケーションになっているのかどうかあやしいのですが、それもほほえましいやりとりです）。取材にうかがった日は、初めて利用するというお母さんが何人かいて、泣き声も絶えませんでした。ママミーさんたちはお母さんと離れたという子どもたちの不安を受けとめ、「泣いてもいいよ、私がいるからね」という思いで抱き、それぞれの子どもにも目を配りながら、かかわっていきま

す。

終わりの時間が近づくと、おもちゃの片付けがはじまります。その後、身体を使った歌遊びと続き、お母さんたちの「ただいま」です。「アンティ・ママミー」では、お母さんが別々に迎えにくることはありません。時間が決まっています（「北国分老人いこの家」の場合、11時40分）、その時間までお母さんはたとえ早く戻ってきてても、外で待っています。このとき、「扉を開けて入ってくる時のお母さんの表情をみてください」と、取材当日にお話を伺った保育士の菅野さんに言われました。

帰ってきたお母さんは、次々にわが子を抱き上げます。実に、いとしさにあふれ

た、やさしい笑顔。この2時間がいかに大切な意味をもつ時間であったかがよくわかります。ひとしきり母子での会話がされた後、「グー、チョコキ、パー」の手遊びをしながら、マミーさんが自己紹介し、最後に一緒に「アンティ・マミーのうた」を歌って終了です。

お母さんのひとりにお話を伺うと、「お迎えに戻ってきて、子どもの顔をみると“かわいい”と思います。子どもにとって集団生活を経験することができて、幼稚園の面接でも泣かなかったんですよ」と教えてくださいました。

マミーさんの「居場所」

活動が終わると、別の場所に移って、今日の「振り返り」です。利用したお母さんたちの感想が書かれたメモを読み上げながら、「〇〇君の今日の様子はこんなだった」と子どもたちの様子を確認し、次回へとつなげます。取材にうかがった日、マミーさんとして活動されていたのは5名。年齢も、マミーとしての活動歴もさまざまです。このうち、おひとりは1歳の娘さんと一緒に参加しています。マミーになったその動機をよく伺うと、「自分が子育ての最中、近所の人に助けってもらったのでその恩返しと思って」（結婚後）保育士を目指

したが、妊娠して途中であきらめざるを得なかったの”などの答えが返ってきました。動機やきっかけはさまざまですが、マミーとしての活動はみなさん一様に楽しいと言います。「ずっと泣いていた子が遊べるようになったとき」「お母さんの笑顔をみたとき」「町で〇〇さん」と声をかけてもらったとき」…。そんなときに、子どもたちからの信頼を感じ、地域に生きていくと実感するそうです。「子どもたちから元気をもらっています」とはみなさんの共通するとても素直な思いなのでしょう。また、「マミーさん同士の交流もとても楽しい」そうです。みなさんとても豊かな表情



振り返りの様子

をされていて、子どもたちとの交流を楽しみ、これを通じて自分の「居場所」を得ている。これはすばらしいことです。

アンティ・マミーができるまで

さて、「アンティ・マミー」設立の経緯をお話しましょう。お話を伺ったのは、「アンティ・マミー」の立ち上げにかかわった「さかえ・こどもセンター」（地域子育て支援センター）主任の甲斐恵美さんです。「さかえ・こどもセンター」で第1回の「アンティ・マミー」養成講座が開催されたのが1998（平成10）年の10月、実際に活動が開始されたのは1999（平成11）年の5月になります。当時、こどもセンターでアンケートを行ったところ、利用者からもっとも希望のあったものが「少しの時間でもよいので子どもをあずけたい」で、表現こそ違え、実に9割以上の人が同様の回答を寄せたそうです。「ニーズがあるなら、これに答えなければ」と考えたものの、費用もスペースも人材も十分ではありません。それなら、地域の力を借りようと、「ファミリリー・サポート・センター」の立ち上げを企画しました。「ファミリリー・サポート・センター」とは、地域で子育てのサポートをしたいという人とサポートを受けたいという人がそれぞれ会員

になり、サポートをしたいという会員の自宅で子どもをあずかるというものです。市町村が実施主体となるのですが、方向性が決まったものの、実際に立ち上げるには長い時間がかかりそうでした。甲斐さんは、「それならボランティアを養成して自分たちでやってみよう」と考えます。市の広報を通じてボランティアを応募したところ20〜60歳代までの10名が集まりました。しかし、実際に研修を行うと「ひとりであずかるのは不安だ」という声が上がります。また、保育園で実習してみると、子どもたちも大勢でいた方がよく遊んでいるようです。このようなことから、保育者も複数で、子どもたちも大勢でというスタイルができあがり、現在に至ります。

ところが、実際に活動をはじめると、考えていた以上に利用者が集まりません。子どもをあずけることに後ろめたさを感じる人が思いのほかたくさんいたのでしょう。ただ、甲斐さんはだからといって積極的に利用者を集めるようなことをしなかったといえます。利用を希望するお母さんがたくさん集まっても、定員を超えてあずかることはできません。利用したいという希望を断わるようなことはしたくなかったのです、と甲斐さんは話してくださいました。ただ、「アンティ・マミー」を利用したお

母さんはその「よさ」を実感できます。「アンティ・マミー」の利用者は口コミで広がっていきました。今では、開催場所も5か所に増え、利用者数は4月〜10月で延べ702名にもなります。今後は市内9か所にある地域子育て支援センターすべてに「アンティ・マミー」の活動を広げていきたいと甲斐さんは意気込みます。

また、福祉医療機構の助成を受けて作成した、「アンティ・マミー」の活動を紹介する冊子は、その内容を多くの人に知ってもらえるきっかけとなっただけでなく、「家族に息抜きの大切さを理解してもらえた」、「子どもをあずけることに対する後ろめたさが少なくなった」など、利用者にも好評だそうです。

アンティ・マミーの可能性

ところで、お母さんに「息抜き」をプレゼントする「アンティ・マミー」の活動ですが、効用はそれだけにとどまりません。甲斐さんは次のように言います。「社会が変わってくると、人間関係も変わってきます。今は情報が多く、(お母さんたちは)情報に振り回され、また(子どもたちを)振り回しているように感じます」。子育て支援の必要性が認識されはじめ「エンゼルプラン」が策定された1994(平成6)

年頃に比較すると、現在では子育て支援という言葉も一般的になり、その支援体制も整備されてきたといえるかもしれません。

サービスもハードも増えてはきましたが、しかし、結局のところもつとも大切なものは、依然課題として残っているのでしょう。それは、甲斐さんの次のような印象的な言葉が教えてくれます。「マミーさんはボランティアです。そのことが、うらやましいと思います」。

一昔前までであった、地域での人間関係やつながりが、今ではうすく細くなっています。地域における人間関係の再興が課題であることは指摘されるところです。しかし、濃密な地縁、血縁を基礎とする関係を再び取り戻そうとすることは現実的ではありません。

これからは、それらとは異なるキーワードで関係性を構築することが必要です。甲斐さんの言葉を借りれば、マミーさんというボランティアによって、地域に「声をかける人、かけられる人」が生まれるのです。「アンティ・マミー」の活動によって、地域に人と人の関係性が生まれていくことで(専門職と被支援者ではありません)、「普通の」市民と市民という関係性です、住んでいる街はもつと安心で温かく、豊かになるでしょう。